

# 「やあ、生きていたんやね」

## 阪神大震災 先輩4人が激白

1995年1月17日早朝、神戸の街は一瞬にして壊滅状態になりました。忘れもしない阪神淡路大震災。開校2年目のカレッジは救援基地となり、学生たちは率先して支援活動に飛び込みました。村内で、避難所で、自治会で。できる活動を、できる場所でやろうと共助の輪はどんどん広がり〈ボランティアのKSC〉はスタートを切ったのです。グループ〈わ〉は「震災支援シンポジウム」開催にあたって、卒業生十数人から当時の体験談を伺いました。その体験はその後の人生にどんな影響を与えたのか、後輩に伝えたいことは何か。4人の先輩に胸中を語ってもらいました。（広報・井口久美子）【文中敬称略】



後藤慶子（福祉1期・北）



宮城智子（音文2期・兵庫）



細野恵久（福祉3期・須磨）



飯井冴子（元事務局）

——震災発生時、どんな状況でしたか。

**細野** 入学して4か月。発生時は布団の中にいましたが、神戸で地震？「まさか」とびっくり仰天。自宅は、屋根瓦がずれた程度で大した被害はありませんでしたが、テレビで都市機能がマヒしていることを知り衝撃を受けました。

**宮城** 細野さんと入学は一緒です。私の家も大きな被害はなかったので、片付けや修理をしながら、クラスメートの安否確認に走り回りました。入学直後に作成した、住所録と写真は大いに役立ちましたね。

**飯井** 自宅は補修程度の被害ですみましたが、水道、ガスは1か月間ストップ。カレッジへの交通手段がなく、代替バスやタクシーを乗り継ぎ、3～4時間かけて出勤していました。道で知り合いに出会うと「やあ、生きていたんやね」が挨拶の言葉でした。

**後藤** 大変でしたね。私は北区在住のため、ほとんど被害はありませんでした。クラスの安否確認は割と早くに行われ、全員無事だったので、安心したことを覚えています。

**飯井** カレッジ事務局でも、在校生（1・2期生）の安否確認を最優先しました。幸い学生さんは全員無事でしたが、音文の講師が亡くなられ、強烈なショックを受けました。

### 村内で、避難所で、施設で活動

——ボランティア活動を始めたきっかけは。

**宮城** 私は音文なので、コーラスでボランティアをしようと楽器を持ちよって、クラスのみんなで練習に取り組みました。初めての慰問は老人ホームへ…徐々に活動先を広げていきました。

**後藤** 1月末でしたか。「村の温泉が無料開放になるので、案内・整理など手伝ってくれないか」と呼びかけがあり参加しました。

**細野** 私は、市内の惨状を知り「何かできることはないか」と区役所へ相談。紹介された避難所で、カレッジの仲間3人と8月半ばの閉鎖まで活動を続けました。

——日々、被災者はどんな様子でしたか。

**後藤** 温泉には毎日、たくさんの人たちが押しかけ、建物の周りまで長蛇の列でした。雪の降る日は本当にお気の毒でしたが、お風呂上りに赤みのさした顔を見て、一緒にホッとしたものです。

**細野** 避難者の関心は物資のことから、風呂やトイレなどへ、だんだん変化していきました。この経験を通して、被災者のニーズを的確に汲み取り対応することが、きわめて大切であることを学びました。ボランティア活動を円滑に進めるには、コーディネーター機能が重要ですね。



――活動中の食事、交通手段は。

**後藤** お弁当を持参し温泉のロビーで。村へはバイクでしたね。

**細野** 私も、弁当を持参しましたが、泊まりの時は支給してくれました。自宅から避難所の東須磨小学校までは、徒歩・地下鉄・徒歩で、ずい分時間がかかりましたよ。

**宮城** 私達もお弁当持参でしたね。交通手段は自家用車に分乗。大久保へ車6台で行った時は、途中で何台かが迷子になり大変でした。

## 「この指とまれ」支援活動

――しあわせの村やカレッジの状況は。

**飯井** 休校中のカレッジは、救援物資の集配拠点となっており、“がんばろう神戸”などのボランティア団体とともに、たくさんの学生さんが仕分けに参加。教室（国際・生環・福祉）には、2段ベッドが入り、佐川急便などの社員が泊まり込みで作業をおこなっていました。

**後藤** しあわせの村は、自衛隊のテント基地と仮設住宅になりましたね。



カレッジ前に並んだ救援物資の輸送車

**細野** 2月に、クラス代表者会議が開かれ私も参加しました。4月から自主学習が始まり、教室には「被災者や地域のために何かしたい」という思いが溢れていましたね。そうそう、7月に事務局が呼びかけて、「この指とまれDAY」が行われましたが、飯井さんは「覚えていますか？」

**飯井** 「良く覚えていますよ」。これはボランティアグループの立ち上げを計画したものです。多くの学生有志が集まってくれ「何をするか」「何ができるか」「今必要とされていることは」…など、具体化に向けて話し合いを重ねました。

**細野** この時、10グループが誕生、私も「子どもと遊ぼう」を結成しました。同時に、「ボランティアセンターを設置しては？」との提案があり、8

月に3人（岡 雄・多井温子・細野恵久）で立ち上げました。これが、今のボラセンとして引き継がれています。

―― 避難所や仮設住宅の状況は。

**宮城** 避難所へお見舞いに行くと、大勢の人がダンボールを囲いにして、その中で過ごしている姿が今でも目に焼き付いています。プライバシーがなく本当にお気の毒でした。

**後藤** 私の自宅近くは、公園や空き地を利用して仮設住宅が数多く建ちました。

**細野** 村には、2,000戸余りの仮設住宅が設置され、ボランティアグループにとっては格好の活動の場となりました。便利大工・カーボランティア・花作りなど、それぞれが特技を存分に発揮。これらの活動を通して、カレッジでは「ボランティア元年」という言葉が生まれましたね。

## 待ちに待った授業再開

――授業が再開した際、クラスはどうでしたか。

**飯井** 10月15日に、今井学長の講話があり11月から授業再開。震災から実に9か月半が経っていました。再開に対して、1期生と2期生では受けとめ方は違ったように思います。入学後4カ月足らずだった2期生は、退学した方も多かったと記憶しています。

**細野** 確かにそうでした。あるクラスでは60%までに減ったと聞いています。ただ、残った者は互いに励まし合い、結束を誓っていました。

**宮城** 震災による転居や退学、音信不通、その後亡くなった人もいて、私のクラスも減少しました。

**後藤** 私は1期ですので、震災による退学はなかったように思います。でも、長田区の火災で自宅を失ったクラスメートが、「北区に来ると別世界に来たようや」とつぶやくのを聞いた時は、返す言葉がありませんでした。

# ボランティアは“心の張り”ですね



被災者で満員の避難所(長田区)

——当時から続けている支援活動はありますか。

**細野** ボラセンの組織と運営の仕組みを作りました。同時に立ち上げた「子どもと遊ぼう」は、「子ども文化」に改称して、双方とも現在に引き継がれています。

**後藤** 人形劇や老人施設のボランティアに長年関わってきましたが、現在も続いているのは昔あそびの会だけとなりました。

**宮城** メンバーの入れ替わりはあるけど地域の高齢独居者訪問、障害者施設の慰問は続けています。

**飯井** 当時から、出来ることがあれば参加するといった状態でした。継続しているものではありませんが、その時々に応じ出来ることをやっています。

## 当時の体験を生かして

——ボラ活動を通じて思ったこと、感じたことは。

**宮城** 震災をきっかけに始めたボランティア活動ですが、人との関係も広がり今ではボランティアが心の張りとなっています。

**後藤** 活動を通して良い経験が積めたと思っています。「ボランティアができるということは自分にとって喜びですね」。

**飯井** ボランティアは、まず「私もやってみよう」と勇気を出すことではないでしょうか。

**細野** 「再び学んで…」を志す意思さえあれば、ボラ活動の有無にかかわらず〈わ〉のメンバーであり続けるべきだ、というのが私の信条です。

——当時の活動は今の生活(人生)に、どんな影響を与えていますか

**後藤** カレッジで学んだこと、呼びかけに応じて活動に参加したことで、様々な経験を積み、たくさんの友達ができました。老後の生活に充実感を

感じています。

**細野** 私も同じくカレッジで学んだこと、震災に遭遇したこと、この2つは重要なポイントです。もしこの2つがなかったら、全く異なる人生を歩んでいたと思います。

**飯井** 生かされたことへの感謝と、生きたかった人への鎮魂を込めて毎年、1月17日には東公園の記帳所で、「命」と書いています。

**宮城** 様々な経験が役に立っています。折々に感謝できることや、他人の苦勞が少しは分かる人間になれたかな…と思っています。

——3年前からグループ〈わ〉がおこなっている東北支援活動について、感想を。

**飯井** 受け入れ側が、どこまで望んでいるのか、冷静に見極めることも大切です。現地に行かなくても、繋がりを持った地域への支援を忘れることなく、形を変えて続けていけば良いと思います。

**細野** できることを、できるだけする、という



仮設で餅つきをする宮城さん

のがボランティアの基本なので、今の東北支援のやり方でいいですよ。

**宮城** 行きたい気持ちはありますが、体力に自信がないので、日赤や区会などを通じて募金を続けています。支援活動に参加している方に感謝です。——貴重なお話をありがとうございました。

●**座談会を終えて** ガレキの町で、先輩たちは「できる奉仕」を果敢に、懸命に実践しました。それが原動力となって、ボランティアセンターやグループ〈わ〉が生まれたのです。私たちは、先輩たちの思いを共有し、しっかり引き継いでいるのだろうか——。体験談に感動しながら、そんなことを考えさせられた座談会でした。

【文中に掲載の写真は卒業生からの提供です】

◆細野恵久さんは、2期生として入学しましたが、98年4月から1年間休学、99年4月3期生として復学しました。